

スコットランドの
文化に触れる

先日、イギリスでの生活を2週間ほど経験した。今回は、そのレポートをしたい。イギリスといっても、滞在場所はスコットランドのみである。

スコットランドでは、まずグラスゴーで借りたレンタカーでアイラ島に向かった。イギリスの交通ルールは、日本と似通っているため、運転にはすぐ慣れることができ、制限速度60マイル(約96km)で軽快にドライブすることができた。

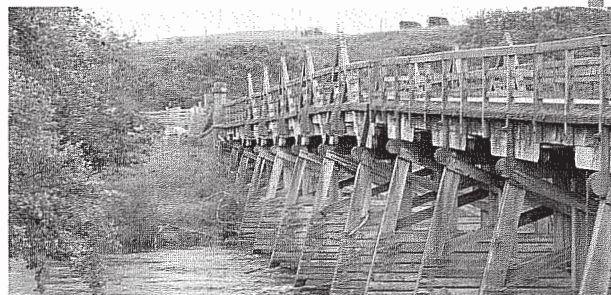
カーフェリーを乗り継ぎアイラ島に上陸。天候は夏でも毎日のように雨なのだが、街中では誰も傘を差していない。瞬間的に降って、すぐに止んでしまうからだ。日本の雨とはずいぶん違うものである。スコットランドの住宅は基本的に石造りだ。宿泊ホテルも築100年や200年というのが当たり前である。車で



▲築100年以上の石造りの建物が今も使われている

1時間ほど走っても、限りなく続く草原には羊しか見えな(?)のだが、そんな草原の傍らに建つ石造りの建物が、スコッチウイスキーの蒸留所である。

羊しかない原野の中で生まれたスコッチウイスキーは、スコットランドの名産の1つ。今は世界的にシングルモルトブームであり、観光名所化している蒸留所もあるのだ。



▲今も現役で活躍する木造の古い橋

各都市には不動産屋もあ

り、日本の不動産屋と同じように店頭のガラスに「売の家」のチラシが張っている。ポンド通貨の高さもあるが、スコットランドの地方都市の民家が3000万円以上しているのには、ビックリするばかりだ。

スコットランドの歴史と伝統を重んじる文化は、日本とは比較にならないほどしっか

りしたものがある。車で走っていると信号機があるのだが、その信号機は、100年以上前に作られた狭い橋を車が1台ずつ順番に走るために設けられたもの。橋は石造りもあれば木造もあるが、国道の橋として、現役で利用されているのだ。

約1年前にホテルやレストラン、道路が一斉禁煙となったスコットランド。公共のものに対する、いわゆるコンプライアンスの意識は相当高いものがあるということを実感した旅でもあった。



えりぐち・きちお

1950年東京生まれ。大学卒業後インドを放浪し、ヒッピーとなる。帰国後、ミニコミ新聞社を経てミサワホームに勤務。2000年にFPFとして独立。相続FPの提唱者でもある。相続FP研究会理事、相続支援ネット代表。